

■経緯

更なる在宅医療推進体制の構築に向けて設置された**在宅医療第2フェーズワーキング**の議論の中で、**病院と在宅の連携強化が重点課題**とされた。病院と在宅とのシームレスな連携体制構築のひとつの方法として、**在宅チームが病院に出向く形での研修**を行うこととなった。

■目的

- ・病院側に在宅医療における訪問診療や訪問看護、介護サービス等の実際を知ってもらうことで、在宅について具体的なイメージを持つことができる。
- ・実際に入院している患者の退院に向けて、在宅チームとの連携の促進を図る。

【Step 1】

＜平成29年度＞巡回型講義形式の研修会

病院連絡会議に出席している12病院＊に出向き、医師を含む病院関係者を対象に開催

（＊救急告示病院9ヶ所、災害協力病院2ヶ所、国立がん研究センター東病院）

- 講師：**柏市医師会**（在宅プライマリケア委員会所属医師）・**柏市訪問看護ステーション連絡会**・**柏市**
- 内容：柏プロジェクトの概要、在宅医療の実際、病院との連携症例の提示等（約1時間）
- 参加者数：**合計648名**

＜Step 1 の効果＞

研修を通じて、**在宅医療の取り組みや実情の理解につながったが**、更なる相互理解を深めるためには、**双方向のディスカッション**が必要との意見が出された。



【Step2】

＜平成30年度＞

グループワーク形式による双方向の研修会

1. 内容

グループワーク形式による意見交換 ※出張版「顔の見える関係会議」をイメージ

* テーマ「スムーズな在宅への移行と急変時等の病院との連携」

2. 研修対象者

【病院側】 医師・看護師・MSW等

【在宅側】 医師（在宅プライマリケア委員会）・訪問看護師・ケアマネジャー等

3. 試行的に実施した医療機関（*結果は連携協議会報告済みです）

■平成30年12月 おおたかの森病院（疾患別のグループ編成で実施）

■平成31年2月 柏市立柏病院（参加職種の幅を広げて実施）



4. 研修の評価

病院側の研修後の意識や行動面の変化を確認し、本研修の実施方法や評価方法について標準化を図り、今後の病院と在宅との連携強化の一助とする。

研修会直後のアンケートの実施

- ・連携強化のために必要と考える取組み
- ・研修会への感想、今後への意見

アンケート内容

研修会6か月後のアンケートの実施

- ・在宅医療へのイメージの変化
- ・具体的な在宅チームとの連携の有無
- ・連携強化のために取り組んだこと

＜Step 2：試行的に実施した2病院での効果＞

病院と在宅との連携への相互理解を深めることができ、更なる連携の推進に向けた課題が明らかになった。その効果を踏まえて、スキームを整え、標準化を図った。

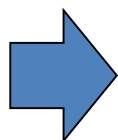
＜令和元年度＞から市内の医療機関での開催へ。

■ 病院側の想い

- ・ 地域医療支援病院としての役割を果たすため、地域との連携強化の機会としたい
- ・ 病診連携の推進（ダブル主治医制の構築）
- ・ 病棟単位での退院支援強化に伴い地域との顔の見える関係づくりを行いたい

■ 在宅チームの想い

- ・ 病院で必要な情報，在宅療養で必要な情報を共有したい
- ・ 病院内の各職種に，在宅医療でできること，在宅医療に携わる人たちを知ってほしい
- ・ 病院内の各職種との顔の見える関係づくりを推進したい



病院側と在宅チームの想いが合致し開催へ

◆ 研修企画打合せ

病院の患者支援センター長（医師），副センター長（看護師長），MSWと市担当者にて計2回に渡り企画打合せを実施

病院側からの提案：事前アンケートの実施

在宅チームに病院側への要望等を事前に伺い，研修内で回答する形にしたい

＜調査項目＞

- ①日頃の業務において，病院と連携するにあたり，困っている点や苦慮している点
- ②今後，病院と在宅との連携を強化していく上で，病院に希望することや要望など

東京慈恵会医科大学附属柏病院での開催

■開催日時

令和元年12月10日（火） 18:45～20:10
 慈恵柏看護専門学校講堂にて

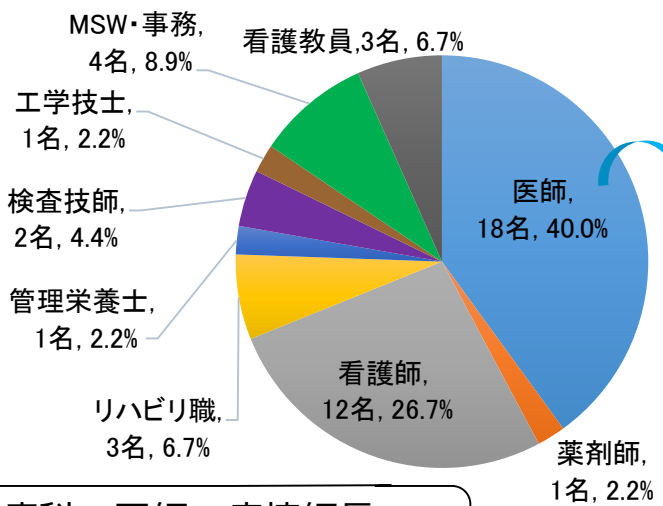
■内容

- ① **グループワーク** テーマ：「スムーズな在宅への移行と急変時等の病院との連携」
 1グループ 8～9名（病院側：3～4名，在宅側：4～5名）×12グループ
- ② **ミニ講義** 患者支援センター副センター長（看護師長）
 講義内容：病院の役割と機能，事前アンケート結果に対する回答

■参加者 計104名（病院チーム：45名 在宅チーム：59名）

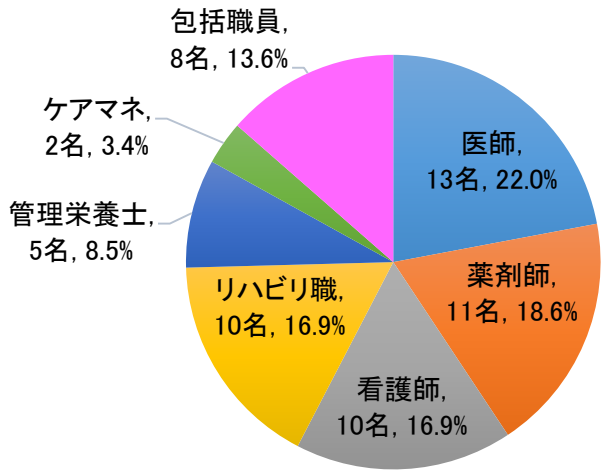
【慈恵柏病院】(N=45)

【在宅チーム】(N=59)



- 【参加医師の診療科】
- 神経内科
 - 腎臓・高血圧内科
 - 循環器内科
 - 糖尿病・代謝・内分泌内科
 - 腫瘍・血液内科
 - 精神神経科
 - 小児科
 - 皮膚科
 - 外科
 - 整形外科
 - 形成外科
 - 心臓外科
 - 産婦人科
 - 泌尿器科
 - 眼科
 - 救命救急センター
 - 輸血部
- <計17科>

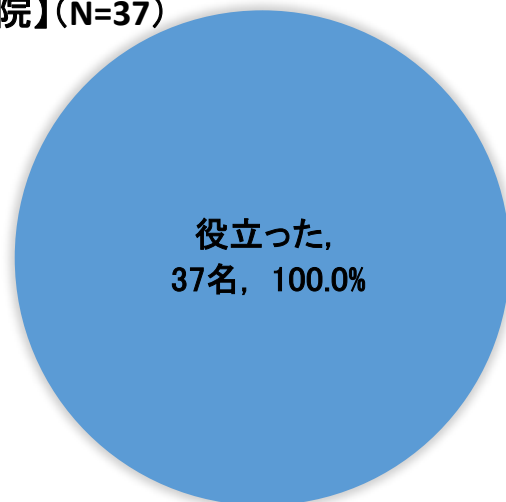
各診療科の医師，病棟師長，
各部門の専門職が参加



1. 実施直後アンケート結果より

① 研修内容について

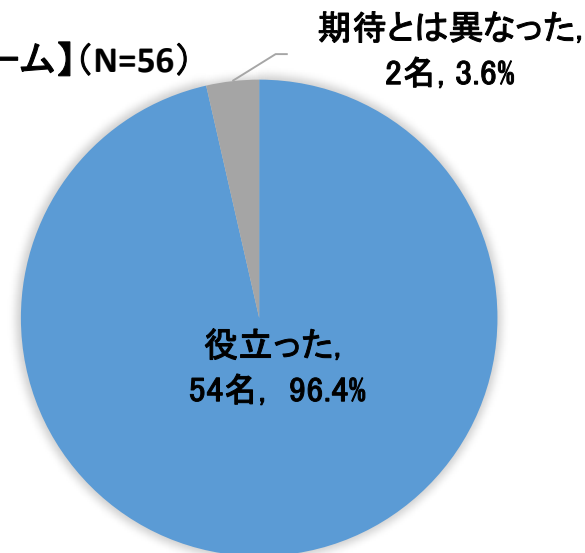
【慈恵柏病院】(N=37)



慈恵柏病院

- ・ **病院と在宅の連携窓口の構築**が大事。(医師)
- ・ 病院内で全てが完結するのが医療というイメージだったが、在宅医療は多職種でチームを作るため、大変であることがわかった。(医師)
- ・ 病院側、在宅側のお互いが必要な情報や、**困りごとが共有できた**ので、良かった。(看護師)
- ・ 検査部門ゆえに、在宅医療や関わる職種について知る機会になった。(技師)
- ・ 地域目線での意見をもらい、また、**地域から求められていることがよくわかった**。(MSW)

【在宅チーム】(N=56)

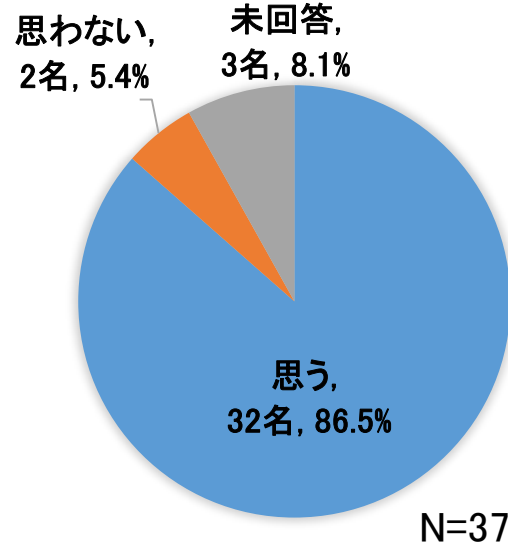


在宅チーム

- ・ **外来通院中から連携することにより、術後処置や退院のスムーズな流れができる**との意見があり、**このような話ができただことが大きな前進だ**。(医師)
- ・ 病院側の考え方を知ることができた。(薬剤師)
- ・ **今後の課題と連携ツールについて考える機会**になった。(訪問看護師)
- ・ 病院側も在宅側も大切なことは同じと改めて感じたが、関係性の構築にはまだ時間が必要。(リハ職)
- ・ 医療側と介護・福祉側の視点の違いを感じた。ただ、どちらも患者(利用者)のことを考えていることはよくわかった。(包括)

②今後、意識して在宅チームとの連携に取り組もうと思いますか（病院のみ回答）

【慈恵柏病院】

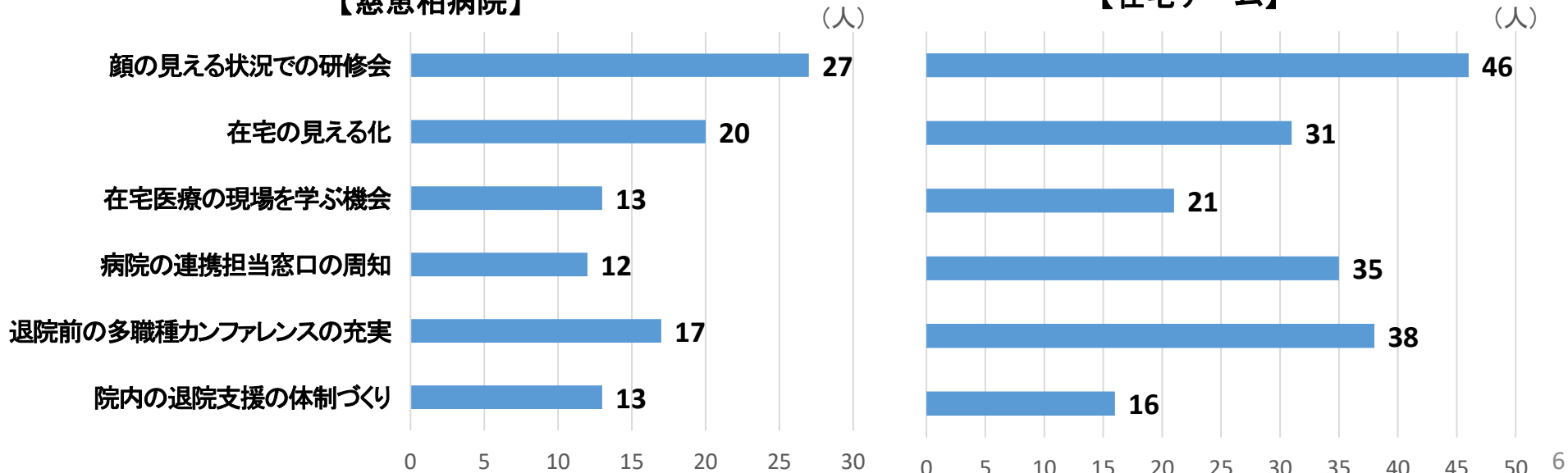


医師	<ul style="list-style-type: none"> ・早期からの在宅移行の準備。 ・診療情報提供書の内容の充実と情報共有の徹底。 ・多職種カンファレンスの充実と、院内のMSW,NSとの連携。
看護師	<ul style="list-style-type: none"> ・退院時共同指導などを勧め、情報共有の場を増やす。 ・研修会への参加。
リハ職	<ul style="list-style-type: none"> ・サマリーの内容の検討や、資源マップの作成を図りたい。
栄養士	<ul style="list-style-type: none"> ・連携したいが、実際にどのようにすればよいのかが難しい。
検査技師	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅との連携について、業務で直接反映できるか不安。

③病院と在宅の連携強化に向け、どのような取り組みが必要ですか（選択、複数回答）

【慈恵柏病院】

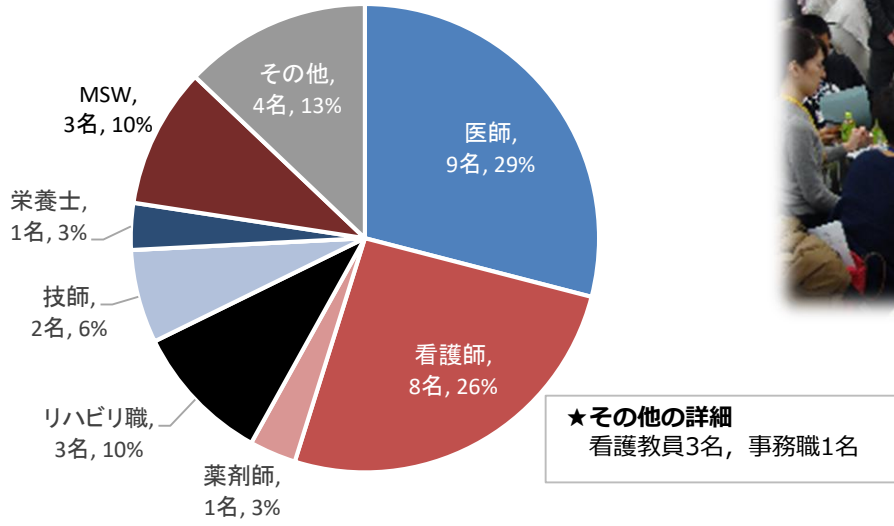
【在宅チーム】



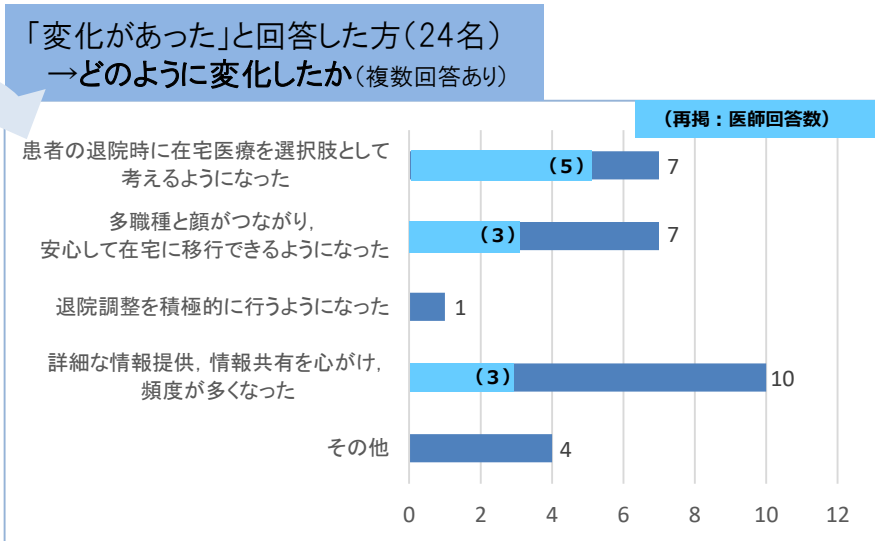
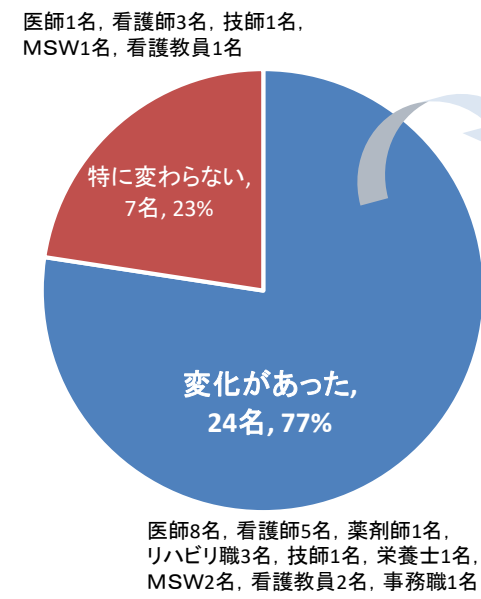
2. 6ヶ月後アンケート結果より (病院のみ)

■ 回答者数：31名 (回答率：68.8%)

① 職種



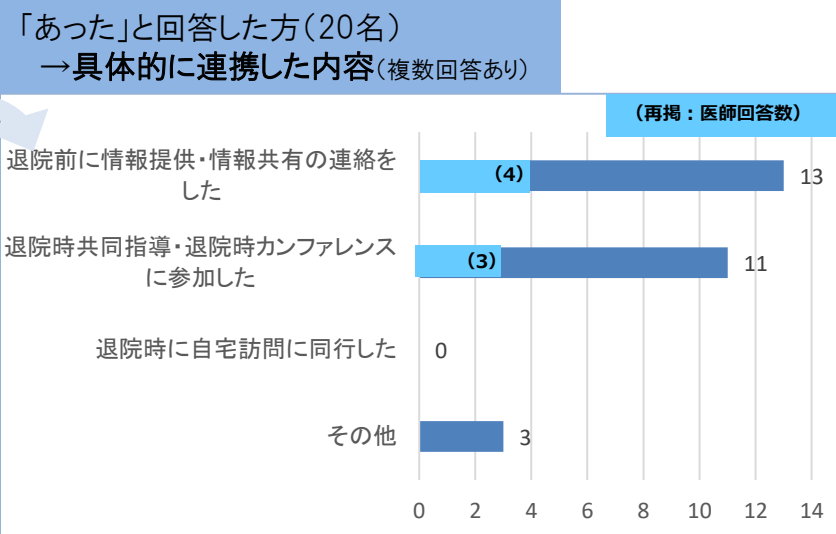
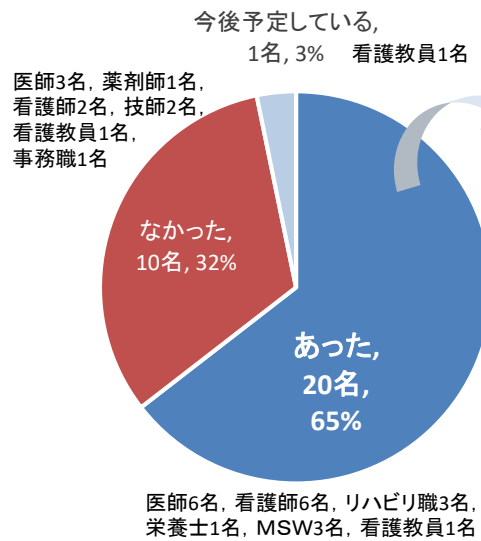
② 研修を受けて) 在宅医療へのイメージや考え方に変化はあったか？



★その他の詳細

- ・チーム(カンファレンス)で方向性を出し, 地域へ連絡することが増えた(看護師)
- ・医療連携業務を行うにあたり, 前方支援だけでなく後方支援をイメージしながら業務に取り組むようになった(事務職)
- ・地域連携の重要性を再認識した。看護学生への在宅看護の必要な内容として追加していきたい。(看護教員)
- ・実際に業務とかがわりあいがないので, 具体的な変化はないが, 在宅医療について知ることができた(技師)

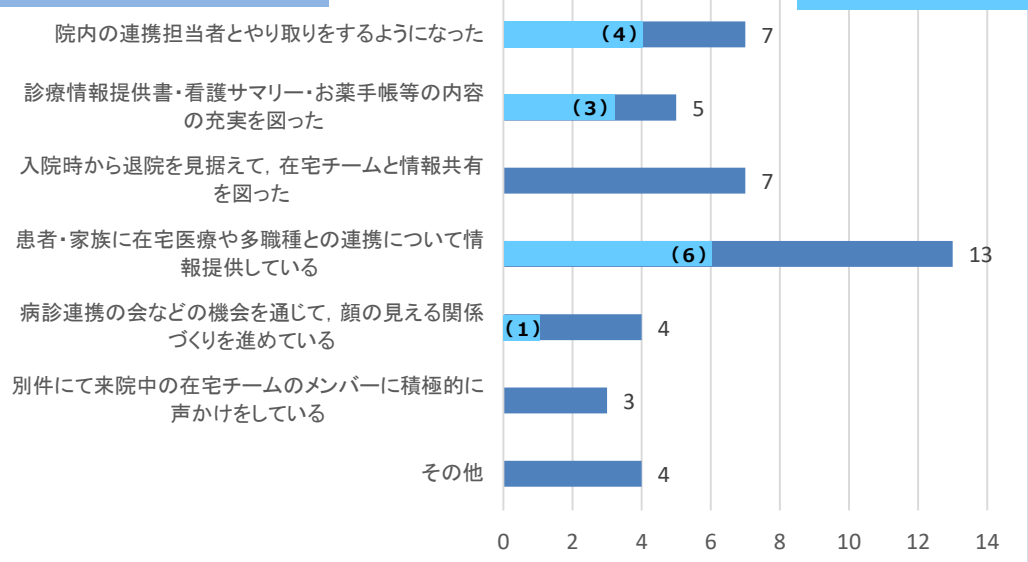
③ (研修後) 業務において在宅チームと連携する機会があったか？



- ★その他の詳細 (3件)
- ・ 外来通院中の患者の支援について情報共有する機会が増えた (看護師)
 - ・ 直接はないが、スタッフを通して (看護師)
 - ・ 学生実習の中で、退院調整の場面にできるだけ参加できるように調整できた (看護教員)

④ (研修後) 在宅チームとの連携強化のために取り組んだこと (複数回答可)

21名(67.7%)が回答



- ★その他の詳細 (4件)
- ・ 各病棟のリハビリカンファレンスにおいて患者のゴール設定や目指せるADLを伝えるようにした (リハビリ職)
 - ・ 病棟看護師などに情報を連絡している (栄養士)
 - ・ 実際に業務とかかわりあいがないので、変化はないが、在宅医療について知ることができた (技師)
 - ・ 近く改正される看護基礎教育カリキュラムの中に、地域包括ケア・在宅医療・チーム連携等の教育内容をさらに多く積極的に取り入れるよう検討中である (看護教員)

⑤研修会についての感想など（全文）

医師	<p>(在宅チームと) 顔が見えるお付き合いができると紹介の幅が広がると思いました。</p>
	<p>今後もこの様な研修会が増えてほしいですが、covid19で…なかなか困難かもしれませんがよろしくお願ひ致します。</p>
	<p>研修医として貴重な場に参加できてよかった。在宅に向けて、詳細な情報を出すこと、先を見据えた選択肢を前もって患者に提示する重要性を感じた。</p>
看護師	<p>いつもありがとうございます。</p>
	<p>地域で患者に関する多職種の方々の意見を聞き、病院という環境と家庭・在宅医療の違いを感じたが、目標を共有することで個別の対応も可能になると実感した。ありがとうございました。</p>
	<p>地域の方と顔を合わせる機会があることで、退院後の生活を入院中からイメージして、何を準備すべきか、必要な情報を地域につなげるべきか考えることができました。周りのスタッフへもその必要性が伝えられるようにしたいと思います。</p>
リハビリ職	<p>退院支援・調整には患者さんの機能・ADLにおいてリハビリ職の役割は大きいと考えます。定期的に患者支援センターとリハビリ科とのカンファレンスの機会があっても良いと思いました。</p>
技師	<p>研修会は普段携わらない部分なため、勉強になりました。医療技術職としては、直接かかわらないため、知識以上の成果は難しく思いました。</p>
他：看護教員	<p>病院中心から地域・在宅中心に視る発想の転換が大きな気づきとなった研修でした。具合が悪くなったら「すぐ病院へ行く」という考え方だけではなく、今後、在宅療養をどのように支えていくか、広い視点、地域での支え方を考えていく必要があることを学びました。</p>
	<p>学生への講義・実習で、地域との連携の実際を取り入れていくために、現在の病院と在宅の連携を知ることはとても大切だと考える。学生達が看護師になったときに、この地域包括ケアシステムの一端を担っていけるように指導するためにも、このような研修会を定期的に開催してほしい。</p>
他：事務職	<p>在宅のスタッフと意見交換できる場所を設けてもらったことはとても良かったと思います。今後も何かしらのかたちで継続していただきたいと思いますです。</p>

★慈恵柏病院での研修会で得られた効果

- 研修を通じて、**双方向の意見交換**を丁寧におこなったことで、**お互いの率直な思いを知ることにつながり**、顔の見える連携体制構築の一助となった。
- 病院側と在宅チーム、それぞれの現状や役割、お互いに必要な情報などを知る事ができ、**スムーズな連携構築に向けた課題の共有**ができた。
- 病院側にとって、在宅チームとのよりスムーズな連携体制の構築に向けた**意識の醸成や取り組みの契機**となり、**実際の行動変容**にもつながっている。



今後の方針

本研修会の効果を踏まえて、**慈恵柏病院での定期的な開催**、および**新たな病院での開催**に向けて取り組みを進めていく。

